

やさぐれみぽりん

穂美璃蘭

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ほぼほぼタイトル通りです。

もしみほがTV版より病んでちよつと自暴自棄になっていたら？って感じの妄想を書いてみました。

# 目次

朽ちた鋼	1
ファースト・ブラッド	7
少女が見た黒鉄（前）	13
少女が見た黒鉄（後）	20
暗い閃光	26
屑の在り処	34



# 朽ちた鋼

機械の騒音が鳴り響くやけに綺羅びやかな広いパーラー。

西住みほはそこで、スロットのリールを眺めながら煙草を吹かしていた。煙草の重いニコチンとタールが頭を冴え渡らせる。

台の下には鉄球を詰めたドル箱が積み重なっていた。大勝といえるほどの儲けだが、顔色は優れない。

「……潮時か」

今日は打ち続けても当分当たる事は無いだろう。そう悟ったみほは席を立ち、ドル箱の玉を景品と馴染みの煙草に換えて店を後にする。

換金所に立ち寄り、手に入れた景品を現金に交換してから、大洗女子学園の学園艦へ向かう輸送船へ密航した。

船が出航し、学園艦と接触するか否かという距離になると、みほは学園艦の側面に張り付いて甲板へよじ登っていく。

不法侵入だと騒がれても可笑しくない行為だが、人気の無い森林地帯に降り立ったため誰にも見咎められることはなかった。

そのまま森を抜けて自宅アパートへの帰路につく。道中、コンビニに立ち寄ってビール缶を買い込んだ。

自宅に戻り、買ってきたばかりのビールを飲み干す。

アルコール度数9%の強い刺激が喉を通り抜けていく。だが、酔いは一向に回らない。

みほは空になった空き缶を投げ捨て、ベッドに身を投げ出す。

天井を見上げているうちに、自然と笑みがこぼれてきた。

「アハハハッ！ ハハッ！」

乾いた笑い声を上げ続ける。

酔っ払っているわけではない。むしろ醒め切っていた。

だが、それでも笑うことを止められなかった。

虚無感のようで、何かが満たされるような不思議な感覚。頭の中が真っ白になるような快感。

また一步死に近づいた気がして、みほは一層強く声を上げる。

その時、部屋のドアが激しくノックされた。

「西住みほ！ 居るのは分かっている！ 早くしろ！」

自分と同年代であろう少女の声。それとは別にもう2人の少女の気配を感じた。

みほは気配を消してドアの鍵を開ける。

「ようやく観念したな、西住みほ！ おい……」

鍵が開くと同時に片眼鏡をかけた少女が押し入ってきた。

みほはその少女の顔面に拳を叩き込む。

その一撃で眼鏡のレンズを砕いた。続けて鳩尾、顎先へと打ち込んでいく。

最後に首を脇に抱え込み、そのまま残り2人の少女へ近づく。2人とも、そして今締め上げている少女も、大洗女子学園の制服に身を包んでいた。

「学園の奴が何の用だ」

片方のポニーテールの少女はすくみ上がり怯え切っているが、ツインテールで幼い体つきをした少女は飄々とした態度でみほの前に立つ。

「丁寧なご歓迎どうも。……話の前に、うちの河島、返してくれないかな？ こんなでも大切な仲間でね」

「……そうか、すまない」

言われて、みほは片眼鏡の少女を解放する。

首筋を押さえながら咳き込む河島桃の横で、ツインテールの少女は不敵な笑みを浮かべていた。

「てか西住ちゃん酒臭くない？ 飲み過ぎじゃない？」

「早く用を言え」

みほが苛立ち気に言い放つと、ツインテールの少女は肩をすくめる。

「まあいいや、私はここで生徒会長やつてる角谷杏。それでね……」

杏と名乗った少女の言葉を遮るように、みほは口を開く。

「戦車道を履修しろ、そう言いに来たのか」

「話が早いねえ、さすが黒森峰の元副隊長」

その言葉にみほは顔をしかめ、苦々しげに吐き捨てた。

「断る」

その反応に、杏は目を細めて薄く笑う。

「へえ、じゃあ君をこの学園艦から追い出さないといけないんだけど」

「丁度いい。そのつもりだったところだ」

「逆に封じ込めると言ったら？」

「力尽くで出ていく、それだけだ」

そう言ってみほは踵を返す。そのまま部屋に戻ろうとしたところで、杏に引き留めら

れた。

「待った、まだ話は終わっていないよ」

みほは足を止めるが、振り返らない。



「今日は引き返す。でも、脅しのネタが増えたらまた来るよ。君は私達の希望になるかもしれない存在だからね」

杏の声色は先程と打って変わって低く、静かなものだった。

みほは振り返り、険しい表情のまま口を開く。

「アタシからも忠告があった。もう少しまともな奴を誘った方がいい」

「そうかな？ 君ほど優れた人材はいないと思うけどね」

「買ひ被り過ぎだ」

杏は肩をすくめると踵を返し、手を振って去って行った。

他の2人もそれに続いて姿を消す。

再び一人になると、みほは床に倒れ、目を閉じた。

瞼の裏にはあの日の光景が浮かぶ。

川に沈んだⅢ号J型戦車。仲間を助けるためにフラッグ車を放棄し飛び込んだ自分の姿。

待ち受けていたのは敗北という結果のみ。

独善で動き、他人を巻き込んで、自分はこれで満足なのか。

なら、自分の感情も意思も全て棄て、死ななければならぬ。

自分の存在価値など無いに等しい。存在する意味が無い。

無駄に頑丈な身体のせいで死ねないのなら、せめて自分を精一杯苦しめなければならぬ。

今自分に出来るのは、死ぬために生きること。

それが自分に出来る唯一の償いだ。

堂々巡りの考えに囚われたまま、みほは深い眠りに落ちていった。

「……西住みほ、資料とは全く違いましたね」

「ま、半年前の資料だしね。三日会わざれば刮目して見よつてヤツ？」

「しかし……会長は本当にアレを当てにするつもりですか？」

「そうでもしないとやってらんないよ。でも、彼女がこれからの大洗を作っていくと思うんだ」

「まるで神頼みですね」

「あんな野蛮な神がいるか！ 私は殺されかけたんだぞ！」

「そう、だからこれは博打だよ。引き当てたのは勝利の女神か、目に映るもの全てを壊す狂戦士か……どっちだろうね？」

## フアースト・ブラッド

翌日、みほは当ても無く学園艦を彷徨っていた。

平日だが、高校に行く気はさらさらない。かと言って、何時もの様にパチンコにも雀荘にも行く気にはなれなかった。

ただただ歩き続け、気が付けば学園艦の外れにある森の中にいた。鬱蒼とした木々が茂っており、まだ昼前だが薄暗い。

みほは煙草を取り出し、明かりを灯すように火を付ける。そのまま煙を大きく吸い込み吐き出すと、紫煙がゆらめき消えていく。

ぼんやりと紫煙の行く先を見つめ、昨夜のことを思い出していた。

戦車道を復活させたいという角谷杏の話。

わざわざ不登校の不良生徒に声をかけてくるとは余程切羽詰まっているのか、それとも何か裏があるのだろうか。

どちらにせよ、自分に選択の余地はない。唯一の価値である戦車道を捨てないことは自分を殺すことなどできない。

角谷杏も哀れだ。折角当てにできると思ったのが、まさかこんな屍同然の女とは思う

まい。つくづく運のない奴だ。

……だが、どんな理由であれ自分が必要とされているなら、それに答えなければならぬのではないか？

そう考えて、ふと自嘲気味に笑う。

そんなはずはない。私が他人に出来ることと言ったら傷つけ、苦しめることだけだ。角谷杏は勘違いしている。すがりつく対象が欲しいだけなのだろう。奴の偶像崇拜に付き合えるほど、私は良く出来ていない。

「他人に入れ込むなど無意味だ」

独りごちて、煙草を携帯灰皿の中に押し入れる。

その時、木々の奥に光るものを見つけた。それは懐かしさと共に、どこか呪いのような忌まわしさをみほに与える。

無意識のうちに足はそちらへ向かっていた。

近づくにつれ、みほは息を飲む。

そこには見慣れていた、巨大な鉄の塊があった。

「何故こんな所に……？」

みほは思わず眩く。

## IV号戦車D型。

ドイツが開発した中戦車であり、大戦中に最も多く生産された戦車、そのレプリカだ。錆びついた砲塔、苔むした車体。

履帯や転輪はボロボロで、あちこち凹んでいる。

しかし、その堂々とした威容はみほの知るものと全く同じだった。

みほは錆びついた操縦手用のハッチを力づくでこじ開け、車内に入る。

中は埃っぽくカビ臭い。長らく人の出入りが無かったようだ。

それでも構わず操縦席に座り込んでイグニッションを入れる。

独特の重音を立ててエンジンが始動し、激しい振動がみほに伝わる。

「駆動系は死んでいない、か」

みほがアクセルを踏むと、IV号は鈍い音を響かせながらゆっくりと前進していった。

「各部正常。燃料も残っている」

戦車の状態を確認しているうちに、久しく忘れていた感情が湧き上がってくる。

ずっと抑え込んでいたものが一気に溢れ出した。

戦車を操れるというだけで胸が高鳴る。血が沸き立つ。

この感覚を忘れていた。

だが、それはみほにとって否定しなければならぬものだった。

自分はもう、二度と戦車道に関わるべきではない。

それに感情に振り回されるなど、自分の最も忌避すべき行為だ。

「アタシは、アタシを殺さなければならぬ」

自分に言い聞かせるように呟いたが、意に反してみほの操縦桿を握る手には力が入った。

IV号は森の中を走り抜ける。時折現れる枝葉を弾き飛ばし、木々の間を縫うように進んでいく。

そうしていく内に、みほは幻覚に襲われる。

川に沈んでいくIII号J型の姿を再び、それが現実であるかのように、鮮明に思い出した。

頭が割れるように痛む。呼吸が荒くなり、冷や汗が流れ落ちる。

「アタシは、ただ、助けたかった、後の結果なんかどうでもよかった、ただ、助けたかっただけだ」

誰に対しての言葉でもない、自分自身に対する言い訳が口について出る。操縦桿を握る手は震えていた。

「違う、誰も助けなんて望んでない、アタシの思い込みで、自分勝手な自己陶醉だ」  
頭痛と吐き気に襲われながらも、みほは必死に意識を保とうとする。

IV号は軋みを上げながらも前進していた。

「アタシは、何故生きている、何故死ねなかった」

IV号は進む。

IV号が動くたびにみほの心はかき乱される。

戦車を降りようとするが、身体は言うことを聞かない。

IV号もみほの意志を無視して勝手に動いているようだった。

みほは自分の手の甲をライターで炙り、痛みによつて身体のコントロールを取り戻す。

そしてIV号を止め、外へ降り立った。

気がつくと崖上まで来ており、瞰下には川原が広がっている。ここから50mはあるだろうか。

みほは何の躊躇もなく、仰向けになりながら飛び降りた。

重力に従い落下していき、やがて地面へ到達。体感的には一瞬で後頭部が打ち付けられ、視界が真っ赤に染まった。

衝撃が全身を駆け巡り、辺りを黒い血で染めていく。

だが、意識は酷く鮮明だった。

「この程度で逝けるものか」

そう吐き捨て、身体中の鈍痛をただ耐え忍ぶ。骨も幾つか折れているのだろうが、そんなことは気にならなかった。

ただ仰向けのまま空を見上げる。

雲一つない、晴れ渡った青が広がっていた。陽の光がみほの身体を照らしつける。それはみほには眩しすぎるものだった。



## 少女が見た黒鉄（前）

「もーっ！ 戦車なんてどこにあるのよーっ！」

草木が生い茂る静寂な森に、少女の声が響き渡る。

声の主は武部沙織。大洗女子学園普通科2年生。

彼女は今、戦車探しに奔走していた。

学園で戦車道を復活するから人員が欲しいと、生徒会に半ば強引な勧誘を受けてしまったのだ。その時見せられた戦車道のプロパガンダ映像は今でも脳裏に焼き付いている。

優雅に戦車を走らせ、敵車両を撃破する姿はまるで映画か何かのようで、戦車道に憧れを抱くのに時間はかからなかった。

自分もあんな風に華麗に戦って、男性から頼れる女性として見られたい。異性に好かれたと思うのは年頃の少女としてはごく自然な事だろう。

だが、現実は甘くはなかった。

まさか学園艦内に遺棄された戦車を探し出すところから始めるとは思ってもみなかった。

そもそもこんな広大な敷地の中で数台しかない戦車を探すなど無謀にも程がある。

最初は友人の五十鈴華、幼なじみの冷泉麻子、そして今日会ったばかりで戦車マニアの秋山優花里と一緒に戦車を探していたのだが、一向に見つかる気配はない。

今は各自バラバラになって搜索している。

「せっかく巻いた髪がボサボサになっちゃうー！ やだもーっ！」

森の中は風が吹き荒れ、沙織の長い朱色の髪を掻き乱していく。

あんな安直な宣伝に引っかけかかった自分が恨めしい。異性にアプローチするときだつて、最初から自分の全てを晒け出して相手にぶつかるとはなく、少しづつ相手の警戒心を解いて、それから徐々に本性を打ち明けていくものだ。いきなり全部さらけ出したら、引かれてしまう。

そんな風に何でも恋愛と結び付けてしまうのは悪い癖だと自覚はしているが、こればかりはどうしようもない。

沙織は気を取り直し、草木を掻き分けながら森の中を進む。

まだ梅雨にも入っていないというのに虫が多い。

特に足下は蟻が多くて、ローファーの中に入り込んでくるのが何とも気持ち悪い。

「もーっ、ほんと何なのお……」

沙織はぼやきつつ、足をばたつかせて追い払う。

その時、沙織の耳が異音を拾う。

鈍く激しい轟音。

「ん？ 何の音？」

不思議に思いつつも音のする方へ向かう。途中でその音は途切れてしまったが、自分の感覚を頼りに進んでいく。

しばらく進んで木々の間を抜け、開けた川原に辿り着いた。

小石混じりの川原を見渡すが、音の発信源らしきものはどこにも見当たらない。だが、沙織の意識はもう轟音でも、戦車でもない別のものに奪われていた。

「人!? 大丈夫!？」

沙織は倒れている人物を見つけ、慌てて駆け寄る。

仰向けに倒れた人物は、自分と同年代くらいの少女だった。

長く伸びた栗毛の髪。黒いタンクトップに紺のホットパンツとラフな格好をしている。

露出している手足はどれも細く、異常なまでに筋肉質だ。

そして後頭部からは血が大量に流れ、顔色は蒼白を通り越して土気色になっている。

「ねえ、あなた、しっかりして！」

沙織が呼びかけると、少女はいきなり跳ね起きた。

何事もなかったかのように歩き出そうするが、すぐによろけて倒れる。

「ちよつ、ちよつと待って！ 危ないよ！ 傷だらけだし、とりあえず病院行こうよ」  
「必要ない」

少女は腰を降ろし、自分の左足を手でなぞる。手が行きついたある部位を擦ると、そこを両手で引つ張った。

「ね、ねえ！ 何してるの!？」

「折れた骨を繋ぎ合わせる」

沙織の問いかけに、少女は淡々と答える。そして右足から鈍い音が鳴り響いた。骨が繋がり、皮膚が引き伸ばされる。

あまりの光景に言葉を失う沙織だったが、我に帰ると同時に彼女の肩を掴んだ。

「そんなことしたらダメだよ！ ちゃんと病院行って、お医者さんに見てもらった方がいいって！」

「必要ないと言っているだろう」

この少女は何を言っても聞く耳を持たないようだ。

しかし、このまま放置しておくわけにはいかない。

「じゃあ、せめてその頭の出血だけでも止めようよ。見てるこっちが痛々しいからさ」  
「……そうか」

沙織の言葉を聞き入れてくれたのか、少女はポケットに手を入れ、ハンカチを取り出して後頭部に押し当てる。

だが、ハンカチはすぐ血に染まり使い物にならなくなった。

沙織は慌てて自分の鞆から予備のタオルを取り出す。

「これ使って！　ほら、頭に巻いてあげるから動かないでよー」

沙織は少女の後頭部に慣れた手つきでタオルを巻きつけた。

「これでよし、と。それにしても、なんでこんな所にいるの？　危ないし、怪我だって酷いし」

少女は何も答えない。

「ねえ、私あなたのこと全然知らないけどさ、こんな所に女の子一人は危険だよ」

沙織は少女の顔を覗き込む。

すると、少女は視線だけを動かして沙織を見た。

「お前（こ）そこ（こ）で何をしている」

少女が鋭い目付きのまま尋ねると、沙織は少し照れたように頬を掻いた。

「実は、学園で戦車道を復活させることになって……昔使ってた戦車があちこちに放棄されてるらしいから、それを探してるの」

沙織の話を聞いた少女の表情が変わる。驚いたようで、そして何か納得したような様

子だ。

少女はしばらく考え込み、そして口を開いた。

「………ついでにい」

「えっ!？」

沙織は驚嘆の声を上げ、同時に疑問符を浮かべる。

少女は立ち上がり、そのまま背を向けた。

「案内する。おぶってやるから早くしろ」

「え? でも……」

「戦車が必要なんだろう」

有無を言わさないその口調は、拒否することを許さなかった。

「わ、わかったよ……」

沙織は戸惑いながらも少女の背中に身体を預け、首に手を回す。

華奢な見た目とは裏腹にしつかりとした体躯は、沙織の体重など物ともしない。

「うわぁ………凄い力……」

「喋ると舌を噛むぞ」

少女はそれだけ言うとう崖に向かって駆け出し、パルクールのような動きで絶壁を登り

始めた。

先程まで重傷を負っていたとは思えないほど俊敏で、荒々しい岩肌を蹴っていく。  
「きゃあああつー！」

沙織は悲鳴を上げて、振り落とされないうよう振動に耐え必死にしがみつく。  
そして数十秒後、少女と沙織は崖上まで辿り着いた。

「は、はやっ……怖かった……」

沙織は息も絶え絶えになりながら、少女の背中から降りて安堵の息をつく。

「戦車……IV号ならそこだ」

少女の指した先には戦車が鎮座している。それは映像で見た戦車のように綺麗な状態ではなく、至る所に錆が浮き、カビが生え、苔むしている。

だが、沙織の目には十分すぎるくらい凛々しく映っていた。

「これIV号っていうんだ……格好いいね、ありがとう！」

沙織は満面の笑みを浮かべ、礼を言う。

その笑みを少女は直視できなかつた。

## 少女が見た黒鉄（後）

「えつと……。見つけたはいいいけど、学園まで運ぶ手段がないよね……。どうしよう」

沙織はIV号の前で立ち往生していた。本来なら学園の自動車部が回収してくれるはずだが、連絡を取ると他の戦車の回収で手が離せないとのことで、自力で学園まで運んでほしいと頼まれてしまった。

戦車の操縦など微塵も分からない。普通車のようにロープで牽引しようにも重さが違いすぎて普通的女子高生の筋力では不可能だ。

途方に暮れていると、少女が沙織に近づいてきた。

「アタシが操縦する」

「あなたが!？」

「ああ。慣れてる」

そう言つて少女はIV号のハッチを開き、操縦席に乗り込んだ。沙織も後を追つて車内に入る。

「ちよ、ちよつと待つてよ！ 怪我人なのに無茶すぎだつて！ 足折れてたのに壁走りまでしてたし、そんな状態で運転なんて無理だよ！」



「アタシには出来る」

少女は頑なだった。

「お願いだから安静にしててよ」

沙織の懇願にも耳を貸さず、少女はIV号のイグニッションを入れ、エンジンを作動させた。激しい排気音と共にエンジンがかかり、車体全体が震える。

その振動は少女の後頭部の患部を刺激し、再び出血が始まった。

「ほら！ やっぱり無理だよ！ とりあえず降りよう？ 戦車運ぶのは後でもいいから  
さ」

「アタシの身体など一々構うな。お前には関係ない」

「関係あるよっ！」

沙織の声が車内に響いた。

今までにない沙織の剣幕に少女は思わず押し黙ってしまう。

沙織は少女の両肩を掴み、真正面から見据えた。

「もう、見てられないんだよ。向こう見ずで頑固で、自分勝手に……でも誰かの為に生懸命になれる優しい女の子が傷ついてくところなんか」

沙織の言葉を聞いているのかいないのか、少女は何も言わずに俯いている。

だが、沙織はそれでも言葉を紡ぐ。

「私、あなたのこと何も知らないけどさ、なんか放っておけないの。私に何が出来るか分からないし、大したこと出来ないかもしれないけど……。あなたは私のこと何も知らないのに助けてくれた。それと同じことをしたいの」

沙織の瞳は真つ直ぐ少女を見つめていた。

少女はその視線から逃れられず、ただ呆然と沙織の顔を見るしか出来なかった。

「私がやるよ。でも初めてだから、運転の仕方とか教えてほしいんだ」

少女はしばらく沈黙した後、観念したように口を開いた。

「……分かった。好きにしろ」

「うん、任せてほしいな」

それから沙織は少女に戦車の操縦を教えるもらいながら、学園を目指した。沙織のおぼつかない操縦は道中何度も車体を木々にぶつけ、時には転倒しかけることもあった。

だが、沙織は一度も弱音を吐かずに、少女も文句一つ言わなかった。

やがて日が傾き始め、夕焼けに染まった頃、沙織の視界に車道が見えてきた。

二人はようやく森を抜けたのだ。

鬱蒼とした森林を抜け、沙織は安堵のため息を漏らす。

だが少女の方に目をやると、先程まで穏やかだった表情は急に険しくなっていた。

車道に出る前に、沙織はIV号を静かに停車させる。

「……ごめんね、上手く出来なくて。返って怪我、ひどくさせちゃって」

激しい揺れや衝撃で少女の頭に巻かれた包帯代わりのタオルは真っ赤に染まり、端から血が滴っていた。

少女は沙織を責めることもせず、淡々と答える。

「気にするなと言った。お前が気に病む必要はないだろう」

ぶつきらぼうな物言いだったが、沙織はそれが彼女の優しさだと分かっていた。

「ごめんね……。ここからの道は分かるから、もう大丈夫だよ。ここまで連れてきてくれてありがとう」

「そうか」

少女はそれだけ言うとIV号から飛び降り、そのまま去ろうとする。

沙織は寂しさを感じたが、これ以上自分が彼女に何か出来る訳でもない。

だが、その思いとは裏腹に沙織は無意識のうちに少女を追いかけ、腕を掴んでいた。「何だ」

少女が振り返ると、沙織は真剣な表情で言った。

「……私は沙織、武部沙織。あなたの名前、聞いていい？」

沙織は少女の目を真っ直ぐ見つめながら答えを待つ。

少女は一瞬躊躇ったが、沙織の目を見て、静かに名乗る。

「西住みほ」

それだけ答えると、みほは駆け出し、茜色の夕日の中へ消えていった。

「……西住みほ、か」

沙織はみほの名を思わず口にする。

沙織はその名前に聞き覚えがあった。

二年生の初めに担任からクラスに編入するとだけ伝えられたが、今日まで姿を見たことが無かった生徒。

転校してきてから一回も学校に顔を出したことがないという。

そのため秘密機関のスパイ、牧師の拾い子、一流の道化師、中東の富豪の御令嬢、ギムナジウム帰りの秀才など多種多様な憶測が飛び交うほど謎に包まれた人物。

「あの娘がそうなんだ」

実際のみほはそんな根も葉もない噂話が霞んでしまう程更に謎の多い少女だったが、そんな彼女に沙織は不思議な魅力を感じていた。

彼女は何で戦車を動かせるのか。

彼女は何で凄まじい身体能力を持っているのか。

彼女は何で学校に来ないのか。

彼女は何であんなに自分を大切にしないのか。

頭の中で疑問が浮かんでは消え、また新しい疑問が生まれる。

沙織は今まで感じたことの無い感情に襲われていた。

「……みほ、また会えるよね」

思考を振り切るように沙織は小さく呟き、再びIV号に乗り込む。

みほに教えてもらった手筈通りにエンジンを掛け、学園へと進路を向けた。

## 暗い閃光

大洗女子学園の校庭には発見した五両の戦車が雑然と並べられていた。

M3中戦車リー。

38(t)戦車B/C型。

Ⅲ号突撃砲F型。

八九式中戦車甲型。

そして、沙織が操縦していたIV号戦車D型。

これらの車両は長らく放置されていたため、整備されていない上にあちこちに錆が付き、履帯は外れかけ、車体も傷だらけで、とても使えるような状態ではない。

そのためまずは各々清掃作業に取り掛かることになった。

車体を磨き、車内の掃除を行い、部品の交換を行う。

皆黙々と作業をこなした。

そうしている内に日は沈み、今は沙織たちと生徒会の面々だけがその場に残っていた。

「ふう、これじゃ戦車道じゃなくて洗車道だな。……疲れた、寝る」

「何言つてんの、麻子はただ水かけてただけじゃん。ほら、こんなところで寝ないの！」  
沙織は疲れ果て倒れている麻子を起こしながら言う。

やる気が出たときの集中力は素晴らしいが、それ以外のときはいつもこうだ。麻子の自由奔放さは今に始まったことでは無いが、それでも慣れないものである。

「IV号は居住性も高いんですよ！ それまでの戦車は基本的に砲塔内に二人までしか入れなくて、車長が装填手を兼任したりしてたんですよ、IV号は三人まで入れるようになって、車長、砲手、装填手それぞれ役割を分担出来るんですよ！ 車長の負担も減つて、車内や部隊内の連携も取りやすくなったんですよ！」

対して優花里は澆刺と、IV号の車内で誰に語るでもなく熱弁を振るっていた。

戦車について語り出した時の優花里は、早口かつ饒舌になり、まるで別人のように生き生きとしている。

「あはは……。相変わらずすごいね、ゆかりん」

沙織は苦笑いを浮かべつつ相槌を打つ。

だが、なんとなくだが共感できる部分もあった。

優花里にとつての戦車は、自分にとつての恋愛と同じようなものだろう。だからその話題になると、つい我を忘れてしまうのだ。

「んで、華は何やってんのよ」

その片端、華は小銃を構え、無言で一点を見つめていた。銃口の先には的代わりのドラム缶がある。

「ええ、拾ってきた銃の試射です。私、砲手やってみたいんです」

それだけ答えると、華はまた一心不乱に狙いを定める。

引き金を引くと、乾いた音と共に弾丸が飛び出す。

だが、その弾は明後日の方向に飛び、近くの土嚢袋に当たって沈んでしまった。

「ふう、やっぱり反動が強いですね」

「……ねえ、それホントに戦車道の試合で使えるの？」

どう見ても素人丸出しな射撃に思わず尋ねる。

「さあ？　少なくとも規則書に駄目とは書かれていないので、大丈夫だと思えますが」

華は平然と答えると、再びドラム缶に向かって構え、照準を合わせる。

沙織はため息をつく、肩をすくめた。

この様子だと何を言っても無駄なのは、長い付き合いでよく分かつてる。

華は見かけによらず頑固な性格なのだ。

そんなことを思っている間にも、華は淡々と銃弾を撃ち込み続ける。

先程よりかは幾分マシな弾道を描いているが、相変わらず的に命中する気配は無い。



そんな姿を見かねてか、背後から杏が声を掛けてきた。

「あく、貸してみ貸してみ。私が手本見せてあげるから」

華から小銃を取り上げると、手慣れた動作で狙いを定め、引き金を絞る。

「ちゃんと端っこを肩に付けて、脇も締めて……ああ、前かがみになるくらいで丁度いいかな。んで、添え手は弾倉でもハンドガードでもどつちでもいいけど、力み過ぎると返ってブレるから、軽く握るように持つて……」

説明をしながら、次々と銃弾を撃ち込んでいく。

放たれた弾が綺麗な直線を描き、標的に吸い込まれていく。

全ての弾が寸分の狂いも無く着弾し、ドラム缶を蜂の巣に変えた。

杏は一仕事終えたとばかりに、手にした小銃をくるりと回し、華に手渡す。

「ま、人に向けて撃つわけじゃないし、戦車相手には牽制程度にしかなんないから、あんまり気にしなくてもいいんじゃない？」

「ご、ご教授ありがとうございます」

華は深々と頭を下げる。

その様子を見て、沙織は少し意外そうな表情を浮かべた。

「会長、すごいですね。偉そうにふんぞり返ってるだけじゃなかったんだ」

普段のおちやらけている態度を知っているだけに、素直に感嘆の声を上げる。

「これでもジュニアリーグでは結構鳴らせていた方でね、昔とつた杵柄ってヤツかな」  
得意げに笑うと、今度は沙織の方へ視線を向ける。

「そうそう武部ちゃん、あのIV号なんだけどさ……」

そう声をかける瞳には、いつもの気さくな笑顔は無く、真剣な眼差しが宿っていた。  
不意に雰囲気が変わったことに戸惑い、沙織は息を飲む。

「あのIV号、君一人で持ってきたわけじゃないよね？ 誰とここまで運んだのか、教えてくれないかな」

杏の言葉は疑問形ではあるが、有無を言わせない圧力があつた。

沙織は一瞬躊躇したが、観念して口を開く。

「えっと、実は友達が見つけてくれて、その子が運転も教えてくれたんです」

「……へえ」

沙織の答えを聞くと、杏は目を細める。

「西住みほ、って知りませんか？ ほら、不登校の……」

「西住みほ!?!」

沙織がその名前を口にすると、優花里は驚愕の声を上げ、IV号から降りて駆け寄ってくる。

「知ってるの？ ゆかりん」

沙織が尋ねると、優花里は興奮気味にまくし立てた。

「知ってるも何も、戦車道界では有名で……。あつ、プロマイドも持ってるんですよ！  
ほらー！」

優花里は生徒手帳を取り出して開き、中に入っている写真を見せてくる。そこには戦車に乗る少女が写っていた。

キューポラから上半身を乗り出しているその姿は凛々しくも可憐で、まさに戦乙女と呼ぶに相応しい勇姿である。

しかし、それは沙織の知るみほとは大きくかけ離れていた。

「……これが、みほ？」

信じられないと言わんばかりに呟く。

髪は無造作に長く伸び、頬は痩せこけて血色が悪く、瞳は虚ろで、どこか淋しそうな雰囲気を持つ少女。

そんなみほと写真の少女が同一人物だとはとても思えなかった。

「はい！ そうなんです！ 西住殿は私の憧れで……」

沙織が呆然と立ち尽くす隣で、優花里は嬉々として語り続ける。

みほが戦車道の名家、西住流の娘であり、去年の全国大会準優勝校、黒森峰女学園で

副隊長を務めていたことなど、優花里は熱弁を振るう。

「本当に西住殿がこの学園艦にいるんですか!? 私、会ってみたいですよ!」

話している内に感情が高まって来たのか、段々と声が大きくなっていった。

「どうかな。あんまり期待しない方がいいと思うけど」

興奮する優花里に対し、杏は冷めた口調で静かに圧力をかける。

先程まで饒舌だった優花里は途端に押し黙ってしまった。

「なんていうかさあ、君達とはちよつと、いろいろと違うんだよねえ。あの子」

歯切れの悪い物言いだったが、それでも沙織には杏が何を言いたいかわかった。

みほのことをよく知らない自分ですら、薄っすらと感じていたことだ。

「家元の娘なのにわざわざ田舎の戦車道がない学校に来た。しかもその学校にも通っていないで、酒と煙草、ギャンブルに明け暮れる。あの娘が今どんな状態かなんて、ちよつと察しが良ければ想像付くと思うけど」

「そ、そんな……」

みほは普通の人間とは違う。戦車に乗るために生まれた、兵器のようなものだ、そう杏は言いたいのだろう。

だから何らかの理由で戦車に乗れなくなった今は、ただ死を待つしかない、と。沙織の中で、妄想にしては妙に納得してしまう考えが浮かんだ。

だが、決して認めたくない。

異様なまでに優しくしてくれた、あの瞳は他の誰かと何も変わらない、どこにでも居る女の子のものだった。

「……みほはただの女の子だよ」

沙織は拳を握り締め、自分に言い聞かせるように独りごちる。

言い返しにならないその言葉に、杏はただ苦笑いを浮かべた。

その傍ら、優花里は暗い表情のまま俯いていた。

## 屑の在り処

遮蔽物のない窓から刺す朝日が、部屋に散乱するビール缶や灰皿に反射して煌めいている。

みほは床に打ち伏せ、ぼんやりとした意識の中、眩しさに目を細めながらゆつくりと瞬きをした。

意識が完全に覚醒すると跳ね起き、浴室へと足を運んだ。シャワーの蛇口を捻り、頭から冷たい水を浴びて身体に纏わりつく汗を洗い流す。

ここ数日の記憶は曖昧だ。雀荘に入り浸っていることだけは覚えているが、そこから先のことはい出しせない。気が付けば夜になり、こうして朝を迎える、その繰り返し。

何もかもがどうでもよくなっていた。執着や関心、生への渴望は、もう消えてしまった。

だが、ふと沙織の顔を思い浮かべてしまうと、途端に心がざわつき始める。

彼女は自分を優しい人間だと言ってくれた。自分に寄り添ってくれていた。自分の身を案じてくれていた。沙織の言葉を思い出す度に胸の奥が締め付けられるような感覚を覚える。

「入れ込み過ぎだ」

自分に言い聞かせるように吐き捨て、みほは浴室鏡を頭突きで割った。

破片で額を切り、血が流れ落ちる。

痛みはない。

あるのはただ虚無感のみ。

割れた鏡を見ながら、みほは自嘲気味に口元を歪めた。

自分は所詮偽善に塗れた、薄汚い愚女だ。そんなものが人並みの幸せを望んではいけない。

沙織も自分の事を知らないから優しく接しただけだ。でなければ、あんな穏やかな環境で健やかに育ったであろう少女が自分を構う理由がない。

彼女も、自分の本性を知ったらきつと離れていくだろう。

それでいい。

私は独りで生き、独りで死ぬしかない。

みほはタオルを取ると血を乱暴に拭い、浴室を出た。

下着とデニムのショートパンツ、黒のタンクトップを身に着けるとベランダへ向かう。

煙草を吹かしながら、青く晴れ渡った空を見上げた。

雲一つない青を紫煙が漂い、溶けて消える。

陽光がみほの頬を照らし、眩しさに目を細める。

そのまましばらく佇んでいると、外に人の気配を感じた。

このアパートは入居者が少なく、通学路からも外れているため普段ほとんど人気がない。

不審にに思い、部屋を出て気配の方へ向かうと、そこには背の低い、白いヘアバンドが特徴的な女子高生が電柱にもたれ掛かって寝息をたてていた。

「おい。こんな所で寝るな、起きろ」

肩を掴み、揺らすと少女は薄く目を開くが、まだ意識がはつきりしていないのか、みほの胸を揉みしだく。

「ン……沙織……」

少女はみほを沙織と勘違いしているのか、彼女の胸に顔を埋めようとする。

「アタシは沙織じゃない。寝ぼけるな、叩き起こすぞ」

そう言つて軽く小突くと少女はようやく意識が覚醒し、顔を上げた。

「……そうだ。沙織がこんなに痩せれる訳ない」

少女はボソツと呟き、みほの身体を観察するようにまじまじと見つめた。

「……悪い。寝惚けてた」



少女は申し訳なきように謝り、背を向け、おぼつかない足取りで歩き出す。だが、またすぐ力尽きたように倒れ込んだ。

「……やっぱ朝は無理だ。このまま寝させてくれ」

「何を言う。学生は学校に行くのが義務だ」

「……嫌だ。眠い」

再び駄々っ子のように地面で丸まる少女に、みほは溜め息をつく。

「仕方がない。校門までなら連れて行ってやる」

その言葉に、少女は飛び起きる。

「……いいのか？」

「こんな場所で寝られるよりはマシだ」

「すまない。助かる」

みほは少女を背負い、電柱の頂上までよじ登り、そこから民家の屋根へと跳躍する。

少女はみほの腰に腕を回し、きつく抱き着いた。

「寝るなよ。落ちたら死ぬる高さだからな」

「分かってる。怖いんだから脅すな」

少女は震えながら眩き、身体をさらに密着させる。

みほは屋根から屋根へ、時には壁すら足場にして素早く跳び移り、大洗女子学園へと

向かっていく。

やがて視界に校舎が見えてくると、少女は口を耳に近づけ、囁くような声で訊ねてきた。

「なあ、校舎裏に降りてくれないか？ 風紀委員のそど子に見つかると面倒だ」

「部外者のアタシが校内に入ってみろ。騒ぎになるだろう」

「アンタ、この学園の生徒じゃないのか？」

「違う」

「……そうか。なら、仕方ない」

少女は残念そうな声色で言うと、さらに強くみほにしがみついた。

校門前に着地すると、みほは背中の少女を降ろす。

周囲にいた数名の登校中であろう生徒達は、その異様な光景に啞然としていた。みほに怪奇の視線が集まる。

「当然、か」

みほは独りごちる。

だが、少女は視線を気にも留めていないようで、大きく伸びをした後、みほの顔をじつと見つめた。

「世話になった、ありがとう。遅刻せずに済みそうだ……本当に感謝してる」

「礼を言う暇があるなら早く行け」

背中を叩くと少女は少し名残惜しそうに離れ、正門の方へ向かっていった。

みほは彼女が見えなくなるのを確認し、踵を返そうとする。

その時だった。

「西住みほ殿……ですよね？」

背後からの呼びかけに振り返ると、くせつ毛で、自分ほどではないものの筋肉質な少女が立っている。

少女はみほが答える前に自分の名前を告げた。

「お初にお目にかかります。普通二課、2年C組、秋山優花里といいます」

自己紹介を終え頭を下げる彼女に、みほは戸惑いを覚えるしかなかった。

「何故アタシの名前を知っている」

「以前から戦車道の情報誌等で存じ上げていました。……去年の決勝戦、貴女に何があつたのかも」

そう言い、優花里はどこか哀しげに目を逸らす。

「なら、アタシに文句でも言いに来たのか」

「違います！」

強い口調でみほの言葉を遮ると、優花里は勢いよく顔を上げ、続ける。

「あの時の西住殿の判断は間違っています！ ……私は貴女の、勝敗より仲間を助ける判断に感銘を受けました。確かに、貴女の判断は誤りだと、そう思う人もいるかもしれませんが。けれど、少なくとも私はそう思いません」

優花里はみほに詰め寄り、熱っぽく語り続ける。

「……何？」

「私は貴女のような、勝利よりも大切なものがある人に憧れて、戦車道を始めたんです。西住殿は私のヒーローなんです！ だから、私達と一緒に……」

みほは気圧され、思わず半歩後ずさるが、すぐに気を取り直して睨み返す。

「言いたいことは、それだけか」

興奮気味に語る優花里の言葉を遮り、みほは冷たく言い放った。

「あの時の私は間違っていた。一時の感情に流され、勝利という大局を見失っていた。その結果がこれだ。アタシがお前の憧れであるはずがない」

「そんなことありません！ 西住殿は……っ!？」

突如、優花里は声を詰まらせる。

みほが自分が何をしようとしているのか分からなかった。

気が付いた時には、優花里の腹に拳を突き立てていた。

腹部への衝撃とみほの鋭い眼光に怯み、優花里はその場でうずくまって、嗚咽を漏ら

す。

「証拠は見せた。次同じような事をほざくのなら、今度は容赦しない」

そう思考よりも先に吐き捨て、みほは今度こそ踵を返し、立ち去った。

「……待つて……貴女が否定しないで……貴女の信じたものを……」

去り際、微かに聞こえた優花里の噎び泣く声に、みほは胸を締め付けられる痛みを感じた。

その気持ちを誤魔化すようにポケットから煙草を取り出し、火をつける。紫煙が肺を満たしていく感覚は、痛みを紛らす程ではなかった。

「偽善に魅入られるとは、愚かな奴だ……優花里」

自分に言い聞かせ、みほはその場から逃げるように駆け出した。

「こんなことしか、アタシに出来ることはない」